小森宅南に、今も代官屋敷という名称があるので察しられる。一時館の内の村役場もそこにあった。この代官屋敷につづいて米倉が二棟あったことは、新編風土記にもみえている。一棟は中荒井組のものであったが、他の一棟は社倉で、八木沢辺の御蔵入地域からも米が運ばれてきたと、古老は語り伝えている。大きさは七間半と十五間半のもので、俗には仕納倉といい、米倉番の家が東向きになっていたという。交通路網が現在のような整備にはいらない以前は、地理的に中荒井村の占める位置が価値が高かったように思われる。

中荒井村の旧館跡、東南隅にある稲荷の小祠
（44.1.8）

3、神社と寺院　館の内の東北隅に土堤跡が残り、稲荷が祭ってある。館の内の稲荷というそうである。貞享二年（一六八五）の書上げにも、「郷頭次郎兵衛屋敷に、古来より崇置」とある。旧豪族屋敷に祭られたものであろう。氏神、部落の鎮守神として発達してきた一連たるものはわからない。

部落の鎮守社は古くより、部落の西南二町にあった諏訪神社であったらしい。貞享二年（一六八九）相殿十一社、文化六年の新編風土記にも相殿十一座とあり、村中にあった白幡・熊野・六所神・羽黒神などを古くから集めて合祀してある。また二日町から伊勢宮・稲荷神なども持ってきている。

近年この諏訪神社の位置も、耕地の整理上移転して、新に村近くに社地を移したので、村の来由との関係はさらにわからなくなっている。最初より村の鎮守が部落より離れてあったものか。これは下荒井村の鎮守なども同様であるが、村の水上の河原に沿う清水の湧き出る森の辺に